

佐渡米通信

こめへる

2025年 3月号

発行日:2025年3月

発行：佐渡農業協同組合 担当：総務部企画課 駒形(葵)
jasadosoumu02@snow.ocn.ne.jp

JA佐渡就農研修生修了、独立就農&法人就農へ

JA佐渡では2021年から担い手育成制度を設けています。本研修制度が始まって初めて4名の方が修了し独立就農・法人就農と農業の現場へ羽ばたくこととなりました。この制度では研修生がJA職員として3年間働きながら、農業の知識や技術を身に付けることが出来ます。農業を始めようとする際に抱える課題として、「農地、資金、地域との信頼関係、営農技術」があげられます。JA佐渡ではこうした課題に対して研修生それぞれに合わせたサポートに取り組んできました。円滑な農業継承やマッチングに繋がられるように、JA佐渡管内の各営農担当者が生産者の方たちの意向を聞き取りするなど情報収集にも努めています。

担い手不足が深刻化する中で、親族外継承など様々な形に合わせた支援を引き続き行って参ります。



修了証書を授与した4名

佐渡の米農家さんにインタビュー

羽茂地区木戸集落の農事組合法人ファーマーズ木戸の代表理事の中川治さんにインタビューさせて頂きました。羽茂地区は^{マルイ}ブランドで有名なおけさ柿の産地で、参加農家のほぼ全員が柿の個人経営を行い、お米は法人による集落営農を行っています。お米はコシヒカリと酒米を合わせて約10ha作っており、その内、朱鷺と暮らす郷認証米を5.6ha作っています。同法人は1977年に設立した任意組織の営農組合が基になっており、2022年に法人化し農地と集落の維持を図っています。設立の翌年以降は黒字を計上出来ているので、今後も経営の安定化に努め、事業を継続していきたいと考えているそうです。法人化以前は点在した田んぼを各戸で管理していましたが、法人への移行後作業の効率化のために皆で管理ほ場の区分けを決めたそうです。これによって田んぼ間の移動時間の削減に繋がりました。栽培管理においても田んぼの地力を把握するために衛星画像によるAI栽培管理システムを導入し、今後の管理作業コストの低減に役立てたいそうです。

中川さんは、農業経営をしていくうえで栽培技術はもちろんのこと、税務や経理の知識も非常に大切だと話されていました。今後も物価高騰のため農業所得がひっ迫することが予想されることもあり、中川さんの言葉により一層重みを感じました。



「農地の維持、集落の維持をして高品質な佐渡米を皆で作りたい」と語る中川さん



一斉草刈りやコスモス畑を設け集落を維持する参加農家と家族の皆さん。田んぼだけでなく集落全体がきれいに管理されている

環境保全に配慮した「温湯消毒」

農薬を使わない
水稻種籾の消毒方法



水稻に感染する病害の多くは種もみに潜んでいるため、播種前に60℃のお湯に浸ける



処理後乾燥し、各生産者へ2月末~3月上旬にかけて配布されます

温湯消毒
春耕転
苗づくり
田植え
水管理
中干し
穂肥
稲刈り
秋耕転
ふゆみずたんぼ

